

文 献 目 録 通 史

—日本および中国における

目録の歴史について—

伊 藤 康 伸

1. は じ め に

ビブリオグラフィー (Bibliography) という用語を「書誌学」と訳しているが、古い英和辞典を見ると、「目録」、または、「書目」と訳されているものがある。

我が国では、一般には、「参考文献目録」、または、「解題」と呼んでいるが、図書館界では「書誌」と称している。

『本朝世紀』中に、

天慶四年八月九日丙申、今日自殿上有勅^{朱雀}召三代実録一部五十卷、
五箇帙、加目録一卷、各有錦端帙。

とあり、文献目録の意味で用いられており、それ以後、多くの書物の書名を記したものを「目録」と呼ぶようになった。

また、『台記』には、

会文士調文書書目録納倉、其筥皆有録。

とあり、同様に文献目録の意味で用いられている。前述の目録の意味から言えば、「図書目録」「書籍目録」「蔵書目録」等と呼ぶのが正しい。

ところで、日常数多くの目録を目にしているが、文字が発生し、書物が現われ、文献目録が編纂されて、長い年月が過っているが、目録の歴史と言うと、書誌学の分野においての研究とされていた。ここでは、学問的な研究としての歴史はさておき、通史的な観点からの流れをふり返り、現在利

用し得る目録について取り扱ってみる。

2. 目録について

二部以上の書物についての研究結果を要約し、記述したものを「書目」と言うが、この編纂は、書誌学の研究にとっては必須の基本的作業であることは言うまでもないが、編纂方法は分類の如何によって多種多様となり、その為、編集並びに分類に関する方法として目録法及び分類法が考究されるのである。

中国において、古くは分類・目録の両者を合わせて「目録学」と称し、独自の方法が完成されているが、我が国においてもその影響を受けている。特に、明治以後は、西欧諸国の方法が導入され、現在に至ってもそれを基準として編集されているものが多いが、明治以前の書物を主体として目録を編纂する場合には、編集方法を考慮する必要がある。

目録の分類は、内容別に編集する方法が基準となっている場合が多いが、その他に、著者・編者名、刊行者、刊行地、あるいは特殊な事情により、出版・販売目録等多種多様である。

3. 日本における目録の歴史

日本における目録の歴史は、奈良朝以前に中国より伝来した経録に始まっている。天平20年(748)の『写経疏目録』などがあるが、主として、仏書を中心とした目録である。平安朝に入ると、伝教大師以下入唐八家の『将来目録』等があるが、漢籍の目録として現存するのは、仁和寛平年間(885~897)に藤原佐世が勅撰・編集した『日本國見在書目録』がある。国書の目録としては、承安5年(1174)に吉田経房等撰の蓮華王院など寺院の蔵経目録が知られている。その他にも『真言宗所学経律論目録』や『東域伝燈目録』などの勤学参考目録がある。平安朝末期になると、国書

の目録である『本朝國史目録』『本朝法家文書目録』や、『和歌現在書目録』等も撰述されている。一方、個人の蔵書目録としては、『通憲入道蔵書目録』がある。これは、国書をも含む現存最古の蔵書目録の1つと見なされている。また、国書目録として有名な『本朝書籍目録』は、純国書類のたぐいとしては稀少価値のものである。鎌倉時代に入ってから、高野板の開板書目が多数見られる。『高野山印板聖教目録』もその内の1つである。室町時代に入ってから、各種の著作目録や、各宗派の聖教目録、寺院の蔵経目録、その他仏教関係の目録が盛んに編纂されたが、国書の編纂された例はめずらしく、文安3年(1446)の『神道書籍目録』や享徳3年(1454)の飯尾永祥編著の『辞書撮壤集 卷下』に所収されている書目の部を見るのみである。江戸時代に入ると、尾州家の駿河御讓本の目録をはじめ、諸家の蔵書目録等も数多く編纂されており、解題書についても、林羅山の『経典題説』や林鷲峰の『日本書籍考』等がある。特に、林家の人々によって編纂されたものが多い。江戸時代になってはじめてできた目録の種類としては、書店の販売目録、学者の著述目録、叢書の内容細目、初学の必読書目等がある。書店の販売目録としては、延宝3年(1675)の『新增書籍目録』があり、著述目録として、堤朝風編の『近代著述目録』がある。その他には、一色時棟編の『唐本類書目録』や、松澤老泉編の『彙刻書目外集』等がある。江戸時代中期から後期にかけては、尾崎雅嘉の『群書一覽』や、森立之等編の『経籍訪古志』がある。また、官板の『書籍解題目録』も編纂されている。同時に、末期には図書索引も編纂されたことも注目すべきことである。

4. 中国における目録の歴史

中国において初めて書物が現われたのは、紀元前1300年以前のことであるが、現在の書物の形態とは異なり、竹に記した簡策であった。現在の形態として初めて現わしたのは孔子である。その後、鉛活字の発達や出版文

化の発展等により急激に書物が人々の目にふれるようになったが、秦の始皇帝の時代になると、いわゆる「焚書坑儒」により書物に対する迫害が生まれた。漢代に至ると、成帝の河平3年（紀元前26）に、初めて書物の収集が行なわれ、中国において初の解題書が建平2年（紀元前5）に劉向によって編纂された。これが劉向の『別録』である。その後、劉向の子劉歆が『別録』を集めて作った書目が『七略』である。この『七略』が中国最古の分類目録である。また、班固が『七略』を簡略にして『漢書』に編入し、『芸文志』と称したが、これは中国に現存する最古の図書目録である。2世紀頃にはほとんどの書物に紙が用いられるようになり、次第に紙製の書物が増大していった。漢が亡んで魏になると、遺亡したものを集めて、秘書中外の三閣に蔵し、魏の鄭默が始めて『中経』を制し、魏のあとの晋では荀勗が鄭默の中経によって『新簿』を編纂した。東晋時代になると、安帝の義熙4年（408）に『秘閣四部目録』が成っている。その後も幾人かの人によって『四部目録』が編されている。これらの三部目録に至るまでに四部分類が慣例になった。一方、これらとは別に、民間において七分法が採用され、宋の王儉は『七志』を編纂し、また、梁の阮孝緒は『七録』を成した。6世紀には、諸家の著作を撰択・編集した「総集」の最も早いものである『文章流別志』や、現存している最古の仏典総合目録である『出三蔵記集』が現わされて、中国の学術の発展と共に、書籍の量も増大してきた。個人の蔵書目録としては、呉兢の『呉氏西齋書目』や、現存しているもので、南宋初年の尤袤の『遂初堂書目』がある。以後、明清両朝における個人の蔵書目録は非常に多く、その中には解題のついたものがある。解題最古のものは、南宋の晁公武の『郡齋讀書志』と陳振孫の『直齋書録解題』で、清の乾隆が学者に編纂させた一大叢書である四庫全書の所収存目各書の解題を集めた『四庫全書総目提要』および、所収各書の解題を簡単にした『四庫全書簡明目録』は、漢籍解題の権威とされている。明代には中国最古の百科全書である『永樂大典』が編纂され、また、楊士奇等編纂の『文淵閣書目』や、張萱編の『内閣書目』も編

集されている。康熙年間に入ると宋元以来の理学家の著作を集めた『通志堂経解』が編集され、また、永楽大典のあとをついだ最大の百科全書である『古今圖書集成』も欽定されている。

5. 目 録 表

(1)	日 本	
748	天平20	写経疏目録
885~897	仁和・寛平年間	日本國見在書目録 藤原佐世奉勅撰
1277	建治3	御請来経等目録 空海録
1368~9	応安1~2	大蔵経綱目指要録
1446	文安3	神道書籍目録
1613	慶長18	大蔵目録
1624~44	寛永年間	御請来目録 空海録
1633	寛永10	梅尾高山寺聖教目録
1648	慶安1	真言宗所学経律論目録 空海撰
1654	承応3	国史経籍史 明, 焦竑輯
1657	明暦3	宝鏡鈔目録 宥快編
1662	寛文2	長西録 長西撰
1667	寛文7	和漢書籍目録
〃	〃	経典題説 林羅山著
〃	〃	日本書籍考 林鷲峰著
〃	〃	釈教諸師製作目録
1670	寛文10	増補書籍目録
1671	寛文11	本朝書籍目録 藤原業忠編
1675	延宝3	新增書籍目録
〃	〃	古今書籍題林
1681	天和1	大明三蔵聖教目録

1681	天和 1	書籍目錄大全
1685	貞享 2	広益書籍目錄
1691	元祿 4	御献上目錄
1697	元祿10	四部要辨 大高阪季明著
1699	元祿12	唐本類書目錄 一色時棟編錄
1702	元祿15	倭板書籍考 幸島宗意撰
〃	〃	俳諧書籍目錄 阿誰軒編
1705	宝永 2	經書要弁 大高阪季明著？
1709	宝永 6	増益書籍目錄
1710	宝永 7	弁疑書目錄 中村富平編
1729	享保14	新撰書籍目錄
1746	延享 3	医学書籍目錄
1751	寛延 4	唐本類書考
1754	宝曆 4	入唐四家請來錄
1759	宝曆 9	群籍綜言 中村蘭林著
1766	明和 3	經史考 井口文炳仲虎輯著
1768	明和 5	外題年鑑 一楽子著
1770	明和 7	和漢軍書要覽 吉田一保著
〃	〃	神道書目集覽 鈴木行義子達編
1771	明和 8	禁書目錄
1774	安永 3	古義堂遺書総目録 伊藤善韻著
1790	寛政 2	諸宗章疏録 謙順編
1791	寛政 3	国朝書目 藤原貞幹編
1801	享和 1	合類書目錄大全 多田勘兵衛編
1802	享和 2	群書一覽 尾崎雅嘉編
〃	〃	印籍考 曾之唯撰
1816	文化13	俳諧書籍目錄
1819	文政 2	古刻書拔 近藤守重・栗原信充編

1820	文政 3	彙刻書目外集 松沢老泉編
1836	天保 7	近代名家著述目録 提朝風輯
1863	文久 3	玉巖堂製本頒行書目
1873	明治 6	新刻書目便覽 太田勘右エ門編輯
1874	明治 7	新刻書目一覽 松田正助編輯

(2) 中 国

(注：刊年不明は□で示す)

□	□	別録 劉向撰
前 6	建平 1	七略 劉歆撰
58~82	永平 1~建初 7	漢書芸文志
258	永安 1	中經 鄭默撰
281~289	太康 2~10	新簿 荀勗・張華撰
□	□	四部目録 李充撰
431	元嘉 8	四部目録 謝靈運撰
434	元嘉 11	宋秘閣四部書目 殷淳撰
473	元徽 1	元徽四部目録 王儉撰
〃	〃	七志 王儉撰
483~493	永明年間	四部書目 王亮・謝朓撰
〃	〃	七録 阮孝緒撰
505	天監 4	古今四部目録 劉香撰
〃	〃	梁文德殿目録
507	天監 6	四部目録 任昉・殷鈞撰
□	□	梁東宮四部目録 劉遵撰
565	天嘉 6	壽安殿四部目録
□	□	德政殿四部目録
580~599	開皇年間	香厨四部目録
581	至德 1	經典積文彙録 陸德明撰
597	開皇 17	七林 許善心撰

627~749	貞觀年間	隋書經籍史 魏微等奉勅撰
713~741	開元年間	古今書錄 母嬰撰
721	開元 9	群書四部錄 殷錢歙重修
945	開運 2	旧唐書經籍史 劉昫等撰
1041	慶曆 1	崇文總目 王暉臣等奉勅撰
1060	嘉祐 5	新唐書芸文志 歐陽修等撰
1225	寶慶 1	遂初堂書目 尤袤撰
//	//	子略 高似孫撰
1237~1240	嘉熙年間	直齋書錄解題 陳振孫撰
1249	淳祐 9	郡齋讀書志 晁公武撰 門人姚宥統輯
□	宋元時代	文獻通考 馬端臨撰
□	□	宋史芸文志 拙克拙等撰
1403~1424	永樂年間	文淵閣書目 揚士奇撰
□	□	篆竹堂書目 葉盛撰
1573~1620	萬曆年間	國史經籍史 焦竑輯
1664	康熙 3	群書備考 袁黃撰
□	□	明史芸文志 張庭玉等編
□	□	經義考 朱彝尊撰
□	□	讀書敏求記 錢曾撰
1744	乾隆 9	欽定天祿琳琅書目 于敏中等奉勅撰
1776	乾隆 41	欽定四庫全書總目提要 紀昀等奉勅撰
1799	嘉慶 4	彙刻書目初集 顧修撰
1807	嘉慶 12	四庫全書未收書提要 阮元編
□	□	孫氏祠堂書目 孫星衍撰
1857	咸豐 7	鉄琴銅劍樓書目 瞿鏞編
1875	光緒 1	書目答問 張之洞撰
1889	光緒 15	天一閣見存書目 薛福成編

1909	宣統 1	邵亭知見伝本書目 莫友芝撰
□	□	清史稿芸文志 朱師轍撰
1928	民国17	書目長編 邵瑞彭等編

6. 文献目録要覧

古書籍（漢籍をも含む）にどのようなものがあるかは古い図書目録や書籍目録を見るのが一番であるが、古い目録に所収されているものには、現在のものに比べて、数も限られている。実際に利用する場合にはかなりの労力を共なっているのが現状である。そこで、ここでは日本と中国において近代以降に複製等の方法により刊行された図書・書籍目録について、若干の解説を加えることにより、利用上の手引きとしたい。

『^{参照}群書一覽』 尾崎雅嘉編 入田整三補
吉川弘文館 昭和6年刊

古代より江戸時代までの国書解題書。1,734種の解題書に、享和以後、昭和4年末までの刊本を加え、入田整三が注記したもの。巻頭に五十音順の書名字引があり、各書の書誌事項、内容、伝本の変遷等を記している。

『続群書一覽』 西村兼文編 入田整三校訂
日用書房 大正15年刊

尾崎雅嘉の『群書一覽』に記されなかった書物を西村兼文が明治20年代に解題したもの。巻末に五十音順の書名索引及び類別索引があり、類別索引は、同一部門内で五十音順に配列されている。

『群書解題』 続群書類従完成会編
同完成会刊 昭和35～42年刊

続群書類従所収本3,493点を、類従と同様に分類・解説している。書名

項目内は、文献所収部名、番号、巻次、完成会版所輯号。解説は、総括的説明、巻冊数、作者、成立年、参考文献等の項目を記している。各巻末には、書名、件名索引などがある。

『国書解題』 増訂版 佐村八郎著

六合館 昭和4年刊

明治以前の国書2万7,000部の解題書。書名はひらがな五十音順に配列され、収録書籍数は明治33年の初版より1万部増になっている。書誌事項、内容事項の他に著者、伝記事項にも詳しい。下巻には、著者索引があり、11綱55目にわたる分類索引がある。浜野知三郎編の『叢書目録』を付載している。

『国書総目録』 叢書目録・補遺，著者別索引付

森末義彰・市古貞次・堤精二編

岩波書店 昭和38～47年刊

国初より慶応3年までの日本人の手による和文・漢文・欧文の書籍の書名五十音順の図書目録。記載事項は、読み、巻冊、分類、編著者名、成立年代、写本・刊本の所在等。全国図書館・文庫の総合所在目録。

『慶長以来小説家著述目録』 中根肅治編

青山堂支店 明治26年刊

慶長以来の戯曲・諸譚・咄本などの著作者・小説家等約400名の著述目録である。名前のいろは順で配列してあり、名、通称、生地、生没年に著作の挿絵画家名等を記し、著作・小説の書名・巻数を記してある。巻末に、元和9年から明治初年までの小説家著述年表を付している。

『慶長以来諸家著述目録』 和学家・漢学家之部

慶長以来の著作を和学家1冊、漢学家2冊に分け、名前をいろは順で配

列し、著作と巻数を記している。和学家には、塙保己一、本居宣長等約400名、漢学家には、伊藤長胤、大槻清崇等約530名が記されている。著作の種類は、医学・兵学・小説・俳諧・芸術・叢書等の分野にわたっている。

『国学者著述一覧』 関書院編集部編

関書院 昭和7年刊

『国学者伝記集成』『古学小伝』『国学家略伝』『近代名家著述目録』『慶長以来諸家著述目録』等から、総合・訂正・再編集したもので、約500名の氏名五十音順に配列されている。記載事項は、(1)氏名(本名・通称・号)、(2)生地、(3)生没年月日、(4)住居、(5)墓所、(6)学統、(7)略伝、等を記している。索引はすべて画引き索引で、氏名の名を探す名索引、書名索引がある。

『漢学者伝記及著述集覧』 小柳司気太監修 小川貫道編

関書院 昭和10年刊

青木昆陽、新井白石、貝原益軒等、元和5年から大正期までに物故した漢学者1,256名について、氏名五十音順に、読みがな、名、字、通称、生没年、著作の書名・巻数等1万4,800余点を記載している。堤朝風の『近代名家著述目録』、東条琴台の『近代著述目録 後篇』、中根肅治の『諸家著述目録 漢学之部』を底本とし、『越佐名家著述目録』等60余冊の書目、伝記書を参考にして編集されている。

『徳川時代出版者出版物集覧』 正・続編 矢島玄亮著

万葉堂書店 昭和51年刊

東北大学附属図書館の「狩野文庫」ほか、天理図書館の「古義堂、綿屋文庫」、国学院大学の「神道書籍解説目録」等40種の書目を底本とし、320人の徳川時代出版者別に、出版物名(書名)1万7,000点を、巻冊数に出版年を添え列挙している。書名索引は1万2,000書名、著者別索引は

8,000名より成っている。昭和43年謄写準備版の増補改訂版である。

『日本古刊書目』 吉沢義則著

帝都出版 昭和8年刊

奈良朝より文禄末年までの古刊書を時代順に配列したものである。刊記のないものは、書名五十音順に配列されている。巻末に、『日本古刊書年表』と『日本古刊文献年表』、さらに、書名五十音順索引を付している。収録されているものに仏書が多い。

『解題叢書』 増訂版 廣瀬敏編

風間書房 昭和32年刊

明治初年までの著述、古典の叢書・全集を集め、収録したものである。難字画引があり、難読書名でも、五十音順の本編の収録箇所がわかる。浜野知三郎の『日本叢書目録』とは逆に、内容題目よりも、それぞれの本の収録されている叢書名がわかるものである。

『全集・叢書細目総覧』 国立国会図書館編

紀伊国屋書店 昭和48～52年刊

国初より幕末までの日本人の手になったもので、明治以降活字本で刊行された全集・叢書名を五十音順に配列し、巻冊順に内容細目を列挙している。索引編は、全集・叢書収録の1つ1つの資料から本編の掲載ページを指示し、資料名が難読のもの索引として、諸書に読みがなを付した難読索引がある。

『古事類苑』 神宮司庁編

吉川弘文館 昭和44～46年刊

日本古来の制度・文物、社会百般の事項を天部より金石部に至る30部門に類別してある。日本最大の類書で、百科辞典であるが、文献案内的要素

が強い。

『群書索引』 物集高見・物集高量著
名著普及会 昭和50年刊

初版は大正5年刊行。百科の事物を項目とし、大項目の下に数多くの小項目を設けて、諸書にある小情報まで、もれなく検索できるよう配慮されている。『広文庫』20冊より百科件名の項目数と紹介文献数においてまさっている。

『広文庫』 物集高見・物集高量著
名著普及会 昭和51～52年刊

初版は大正5年刊行。百科件名が五十音順に配列され、古文献の書名、関連記事のある巻冊数が示されている。それに続いて、諸書の記事の中から抜粋・抄録がある。

『日本随筆索引』 太田為三郎編
岩波書店 大正5年刊

明治以前の随筆、伊勢貞文の『安斎随筆』、滝沢馬琴の『燕石雑誌』、喜多村信節の『嬉遊笑覧』など164種の合同内容索引である。五十音順の件名1万6,000項目のもと随筆の書名と巻数を記してある。巻末に収録書目があり、著者名、巻数、刊行年代、収録刊本名を記している。

『続日本随筆索引』 太田為三郎編
岩波書店 昭和7年刊

178種861巻、付録4種が収録されており、編纂方法は『日本随筆索引』と同じである。件名は、冠称を省いた名称で記載されており、収録書名は巻頭におかれている。

『日本随筆七十四種索引』 謄写版 矢島玄亮編

シオン謄写堂印刷 昭和33年刊

太田為三郎の『日本随筆索引正・続編』に収録されなかった随筆類74種を索引対象としたものである。

『中文参考指南』 何多源著

嶺南大学図書館 民国25年(1936)刊

2,081種の基本的な参考図書を列举し、解題している。内容は、上編の字典、辞典、百科全書、類書、書目、索引の類から、下編の国学、経学、年鑑、文学、歴史等に至るまで広範囲に及び、書末に、中文参考書百種選、英文関係於中国之参考書挙要、全国出版家指南、書名・著者類目索引を付している。

『中国参考書目解題』 鄧嗣禹・Biggerstaff 共編

北京燕京大学哈化燕京学社 民国25年(1936)刊

中国の重要参考書280余種について解題したもの。国学に限り、古書を主として、書目、百科全書、字典等8種に分類している。

『中国通俗小説書目』 孫楷第編

北京図書館 民国22年(1933)刊

宋元、明清講史、明清小説等に分類し、各書の書名、巻数、存否、テキスト、撰者、序跋等を録し、必要に応じて、内容、所蔵者、按語などを加えている。

『東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録』 東洋学文献センター編

昭和48年刊

東洋文化研究所所蔵の漢籍の目録で、経・史・子・集・叢書の五部と新学部に分かれている。その蔵書中には、大木文庫本(4万5,452冊)、双紅

堂文庫本（3,150余冊）、仁井田文庫本（5,000冊）及び旧東方文化学院東方研究所所蔵本等を含んでいる。なお別に、昭和50年刊の書名人名索引があると共に、東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録書名人名索引・京都大学人文科学研究所漢籍分類目録書名人名通検合併四角号碼検字表（昭和52年刊）がある。

『叢書大辞典』 楊家駱編
南京辞典館 民国25年（1936）刊
中国学典館再版 1967年刊

叢書 2,797 種を収め、ある叢書が何を収めているか、またある書がどの叢書に収められているか調べられるように編集されている。叢書子目類編と叢書総目類編とからなり、叢書書名索引・索引字頭筆画検字を付している。

『近世漢学者著述目録大成』 関儀一郎・関義直共編
東洋図書刊行会 昭和16年刊

元和5年（1619）から昭和12年（1937）まで 319 年間のすでに物故した漢学者約 2,900 名の著述・編纂・校点に係る書目を著者別に列記したもので、各人に略伝が付され、付録として系譜がある。

7. お わ り に

以上のように、日本および中国における目録の歴史を簡略にはあるが示してきたが、特に、第6章文献目録要覧に記した資料を十分に使いこなす（利用する）ことは至難の業である。当紀要第2号の中で、本学図書館福井司郎氏は次のように述べている。『図書館員は本の番人ではない。自館の資料にとどまらず、あらゆる資料を、それを必要とする人に迅速に提供することが最大の使命である』と。私自身も現に図書館に勤務する一人

なのであるが、前述の資料を含め、他の資料をも十分に活用することは非常にむづかしい。一資料でよいから十分に活用できるようにと考えている次第である。

〔引用文献〕

- 矢島玄亮：和漢古書目録法の知識 万葉堂書店 昭和51 p. 16～20.
- 田中敬：和漢書目録法（田中敬著作集 第4巻） 早川図書 昭和55 p. 4～5.
- 深井人詩：文献目録要覧（新校群書類従 別冊 古文献読解便覧） 名著普及会 昭和53 p. 63～68.
- 福井司郎：中京大学における学生の図書館利用に関する調査から（中京大学図書館学紀要 第2号） 中京大学附属図書館 1981 p. 39～40.

〔参考文献〕

- 倉石武四郎：目録学（東洋学文献センター叢刊 第20輯） 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター 昭和48
- 長澤規矩也：書誌学序説 吉川弘文館 昭和54
- 劉国鈞：図書の歴史と中国 松見弘道訳 理想社 昭和38
- 川瀬一馬：日本書誌学之研究 講談社 昭和46
- 天野敬太郎：日本書誌の書誌（総載編） 巖南堂書店 昭和48
- 内藤虎次郎：支那目録学（内藤湖南全集 第12巻） 筑摩書房 昭和45
- 幸田成友：書誌学の話（日本書誌大系 7） 青裳堂書店 昭和54
- 近藤春夫：中国学芸大事典 大修館書店 昭和54
- 姚名達：中国目録学年表（人人文庫 337～338） 台湾商務印書館 民国59
- 鄭鶴声，鄭鶴春：中国文献学概要（人人文庫 397～398） 台湾商務印書館 民国55